かささぎ 通信 第79号（新元号特別版）

2019年 4月 1日 発行

毎月第2金曜日 13：30～15：30 中央図書館研修室

（参加自由 次回4月12日） 森三郎刈谷市民の会 「森三郎の作品を読む会」

森三郎童話「梅の木」と新元号「令和」につながりが・・・・

二〇一九年四月一日に、五月一日から改元される新元号が「令和」と発表されました。その典拠として『万葉集』の「梅花の歌三十二首 序を并せたり」の序の部分「時に、初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫ず。」（読み下しは岩波書店『日本古典文学大系 万葉集二』73頁による。旧仮名遣い）が紹介されました。

「かささぎ通信」第71号で紹介しましたが、『万葉集』巻五の「梅花の歌三十二首 序を并せたり」は、天平二（七三〇）年正月十三日の、大宰帥大伴旅人邸での梅花の宴に集まった三十二人が詠んだ歌をまとめたものです。

その第四番目に筑紫守山上太夫（山上憶良）の歌（国歌大観番号八一八）が載っています。

春されば まづ咲く宿の梅の花
独り見つつや春日暮さむ

（春になると最初に咲くこの家の梅の花を、ただ一人で見ながら春の長い日を暮すことであろうか。）という歌です。（当時、旅人六十六歳、憶良七十一歳）

森三郎は、憶良のこの歌を題材にして『赤い鳥』昭和八年一月号に「梅の木」という童話を発表しました。梅の木がうぐいすに、今度引っ越してきた人は「名高い歌よみの、山上憶良さまだ。」と教えています。梅の木は自分のことを歌に詠んでもらったので、そのうれしさと言ったらなく、二度も三度も憶良の歌を繰り返し歌いました。森三郎はこの童話の中に『万葉集』巻五の九〇五の歌も載せ、男の子を病気で亡くした親の悲しみを、梅の木にまつわる話としてまとめています。

新元号「令和」の出典から、思いがけず森三郎童話とのつながりが浮かび出て来ました。「梅の木」は刈谷市教育委員会編『森三郎童話選集 かささぎ物語』に収められています。ぜひ読んでみてください。

森三郎は古典に題材を採った童話をたくさん書いていますが、『万葉集』から題材を採った作品としては他にも「三條中納言」（『赤い鳥』昭和六年十一月号）、「みかん」（昭和七年一月号）、「鼻のはれもの」（昭和七年四月号）などがあります。「三條中納言」は『森三郎童話選集 夜長物語』でも読むことができます。

予告

「第7回 森三郎に親しむ集い」を開催します！

日時 二〇一九年六月二日（日曜） 午後一時半～三時（受付一時～）

会場 刈谷市中央図書館 三階 大会議室（自由席二百人）

内容
- 「平成三十年度森三郎童話賞子ども部門読書感想文・創作作文コンクール」優秀作朗読
- 私の文学散歩「森三郎童話『目ぐすり』」（スライド）
- 『赤い鳥事典』（二〇一八年刊）の森銑三・森三郎と刈谷
- バイオリンとチェロで奏でるあの曲…
- 新作森三郎童話紙芝居「赤鬼青鬼」（第十作目、スライド）

子どもさんも大人の皆さんもみんなで楽しみましょう！